［二〇〇四年度大会シンポジウム］特集　思想史における一九三〇年代――京都学派の位置

京都学派・その多様性をめぐって――コメント＋討論のまとめ――

田中久文

提題者へのコメント①――高橋文博

○高坂氏へ

京都学派に関する高坂氏の価値評価についてだが、哲学的論理という観点からみた評価なのか、社会的政治的立場からの評価なのか。たとえば、高坂正顕の歴史哲学に帝国主義的な側面があるとか、田辺が原理日本主義の人たちと論争したとき「惨めな敗北」に終わったとか述べているが、そうした評価はどのような観点からのものなのか。

○米谷氏へ

米谷氏は、「東亜共同体論」や「世界史の哲学」が、日本では植民地主義の新たな形での理論的補強という役割を果たしたが、朝鮮では朝鮮社会の自立・発展をめざす論理となりうる可能性をもっていたとしている。しかし日本においても、こうした言説は狂信的な帝国主義者へのチェックの機能を果たしたとはいえないのか。そうした意味で、そこに合理性をみることはできないのか。総じて米谷氏の発表は日本に厳しく、朝鮮知識人に甘いように思うが、どうか。

○中岡氏へ

直観や自然に決別をした下村にも、本質主義が残ってしまったと中岡氏は述べているが、それはどういうこと

か。要するに西田も田辺も下村も、無‐根拠に徹することができなかったということなのか。

バシュラールをめぐって、合理性への絶えざる点検・修正ということが問題にされ、それに対して「絶対」をいいつのった京都学派のあり方が批判されている。しかし、そこでいいつのっている「絶対」とはまさに「無」であり、だからこそ完成即未完成、未完成即完成という形での無限のプロセスを京都学派でも説いていると思うが、それでも両者は根本的に異なるといえるのか。

提題者へのコメント②——田中久文

○高坂氏へ

京都学派全体に対して、高坂氏がどう評価するのかという点が十分に読みとれなかった。たとえば田辺の「種の論理」について、ナチズム的民族主義との関連を指摘しているが、そうした一面的な評価だけなのか。中岡氏の発表にもあったように、田辺の哲学には「既存性破壊・未来解放的性格」といった革新的な側面もあるように思うが、そうした点はどうなのか。また田辺の「種の論理」と務台の「社会存在論」とを並べて論じているが、両者の関係をどうとらえているのか。務台に田辺を乗り越えようとした所がみられると考えているのか。

○米谷氏へ

米谷氏は、「東亜共同体論」や「世界史の哲学」について、論理自体は評価すべきだが、その適用にまやかしがあったと考えているのか、それともこうした考え方にみられる文化多元主義そのものが何かを隠蔽するものだと考えているのか。たとえば、朝鮮の知識人によるこうした言説の導入が、単なる受容ではないとしているが、それは論理の上で何らかの変更が加えられているということなのか、それとも実際の適用に関して違っていたということなのか。

○中岡氏へ

下村は、無‐根拠・無‐意味を徹底させることによって、「新しいタイプの主体」を創造したと中岡氏は指摘している。では、そうした下村は京都学派全体のなかでどのように位置づくのか。たとえば、田辺も主体性や創造を語っているが、しかし田辺の場合には「絶対無」が超越的な根底といったものになってしまっているという。その場合、下村と田辺の違いは決定的なものなのか。京都学派の思想家たちは、みな「無」の論理のさまざまなヴァリエーションのなかにあると中岡氏はいうが、田辺の説く「絶対無」も、下村の説く無‐根拠・無‐意味も

同じヴァリエーションのなかにあるのか、それとも下村は新たなところに突き抜けていったということなのか。下村が、一面で本質主義を語ってしまっていることの問題ともからめてどうか。

両コメントに対する提題者の回答

○高坂氏

論理的評価か社会的評価かという質問だが、私の評価は後者の立場によるものである。その場合、一九三〇年代の京都学派の豊かな成果を認めつつも、戦争に向かっていった負の側面に注目せざるをえなかった。私は、日本の敗戦を天皇制国家と日本帝国主義の破綻と考えるが、京都学派もそうした文脈のなかでとらえざるをえない。柳田謙十郎のいったように、国民は軍部には反発しつつも京都学派の議論には納得した。それだけ罪が深いという面を考えたい。

務台の「社会存在論」は、田辺の「種の論理」を越えようとしたものなのかという質問だが、そのようにはいえない。務台は戦後、「社会存在論」の根底には西田の宗教的哲学があったとして、自己批判している。私は、「社会存在論」のなかに戦後の務台がめざした社会主義とつながる面がるのではと考えたこともあったが、そうした面はやはりみつけられなかった。

○米谷氏

日本側は悪かったけれど、朝鮮側はよかったなどといっているつもりはない。また、西田・田辺には問題があったけれども、三木などの京都学派左派はよかったなどというような観点もとっていない。

また、狂信的な軍国主義に対して京都学派には合理性があったとも考えない。もちろん一定の合理性があるからこそ当時の人も受け入れたのであろうが、しかし合理性・普遍性を説くところにこそ問題が潜んでいるのだと考える。

また「東亜共同体論」や「世界史の哲学」の論理に問題があるのか、その適用に問題があったのかという質問だが、私は論理とその適用とは区別できないものだと考えている。論理が社会のなかでどういう役割を果たしたか、という観点からみるべきである。京都学派の哲学自体も歴史的世界のなかで理論をとらえようとするものではなかったのか。主観的意図からする合理性が問題なのではなく、具体的な関係性のなかでの合理性こそ問われなければならない。

○中岡氏

問題はすべて「近代の超克」のなかにあるのだが、いまだに誰も本当には近代を超克していないのではなかろうか。したがって京都学派の「無」について、ここがいい、ここがだめだなどといった視点そのものが、不十分なものなのかもしれないとも考えたりする。

また京都学派の「無」の哲学が、全体主義に親和的であるという見方があるが、「無」の論理それ自体は何でも入りうる論理のような気もする。あるいは「無」の論理は、具体的な文脈に関して説明能力をもたないといってもいいかもしれない。もちろんそれが、ある場面では批判的機能をもちうることもあるのだが、しかしまた逆にも機能してしまうのだ。

下村が京都学派のなかでどう位置づくのかという質問だが、彼の数学の無限論をみると、無‐根拠性と直観主義とが混在している。そうみると下村が京都学派を十分に超えているとはいえないように思える。ただし、下村などの京都学派の第二世代には、「実験性」という方向がより強く出てきている、ということはいえそうだ。たとえば下村は、アメリカニズムもヨーロッパ文明の可能性の「実験」なのだといっている。しかし、そうした可能性はもちながらも、西田・田辺の「無」の哲学の新しい次元を切りひらくには至っていないと思う。

今回は「無」の論理に焦点を当てたが、田辺・下村らの科学論は現代の科学社会論を先取りするような問題提起を含んでいる、その点にも注目する必要がある。また田辺の科学論は、東北大学時代に成立しており、そうした点では「京都」学派という閉じた視点からだけで問題にしない方がいいのかもしれない。

フロアーからの質問と回答

○平子友長氏（一橋大学）から米谷氏へ

米谷氏は、朝鮮の転向左派知識人をもって植民地側の反応を代表させているようだが、それでいいのか。「帝国日本」への抵抗ということであれば、転向左派知識人が代表とはいえない。中国や現ロシア領まで含めた広い地域での「帝国日本」への抵抗の構図のなかで、転向左派知識人の言説の果たした役割を考えるべきだ。

また朝鮮知識人は、西洋近代の言説の支配下にあったがゆえに、「近代の超克」としての京都学派の言説もすんなり受け入れてしまったということはないのか。もっと朝鮮の固有文化・伝統に即した抵抗というものを考えなければいけないのではないか。

○宇野田尚哉氏（神戸大学）から米谷氏へ

朝鮮の転向左派知識人の研究は、韓国でも進んでいるようだが、米谷氏の研究はそれとどうリンクするのか。特に韓国の研究者と日本の研究者とではおのずから視点の違いがあるはずだが、米谷氏はどういう視点から問題にしようとしているのか。その点を明確にしないと、当時と同じことを繰り返すことになってしまう恐れがあるのではないか。

○平子・宇野田両氏への米谷氏の回答

戦前はマルクス主義が弾圧された暗黒の時代で、戦後は解放の時代だといった図式をやめ、そこにある持続した問題を明らかにしようと私は考えている。したがって、転向左派知識人を抵抗の代表としているつもりはまったくない。中国に行ってあくまで抵抗した人、日本の統治下の朝鮮にとどまった人、色々な立場があったが、それらを全体としてみていきたい。それらがいかにつながっているのかを明らかにするのが歴史の想像力だ。韓国でも北朝鮮でも、そうした議論は今まで封殺されてきた。

○平石直昭氏（東京大学）から中岡氏へ

下村は無-根拠・無-意味に徹することによって主体の能動性・創造性を説いたというが、それでは「価値」というものはどこから出てくるのか。というのは、日本思想史において、福沢諭吉や荻生徂徠などのように「制作」を問題にした人たちがいるが、彼らと共通の問題が下村にもあると思うからだ。福沢は、近代科学と独立心が東洋にはないといっている。それを福沢は学ぼうとしたのだが、その際道徳というものはどう基礎づけられるのか。福沢をヒューマニズムとすると、道徳をささえるヒューマニズムはいかにして可能かという問題がそこにはある。下村にも共通した問題があるように思われるが。

○中岡氏の回答

下村の場合、超越的な価値というものを想定しているとは思えない。だからこそ科学論に関心をもったのだと思う。しかし、それにも関わらず確かに下村には価値を求めるような思考パターンが入ってきてしまっているのは事実だ。それはなぜかはまだよくわからない。ただ下村には、ファウスト的な前進のエネルギーといったものがみられる。

○黒住真氏（東京大学）から中岡氏へ

冒頭で、下村の科学技術社会論について触れていたが、平石氏の提起された問題と関わらないか。

○中岡氏の回答

下村の科学技術社会論は、どういう経済的社会的条件のなかで科学技術というものが出てきたかという議論なので、価値といった問題とは無関係のように思われる。

○鈴木正氏（名古屋経済大学）から中岡氏へ

下村は、京都学派のなかでも最も合理主義的であった。それが下村の「価値」だといえないのか。彼の「東郷平八郎論」もそうした立場から書かれたものだ。

○中岡氏の回答

合理主義的といえば確かにそうだが、合理主義にも色々ある。例えば下村にはファウスト的な主体性がみられるが、それはデカルト的な合理主義とは異なる。一方また別の角度からいうと、下村にはシステム論的発想もあるが、それも近代合理主義とは違う。

○鈴木氏から米谷氏へ

転向左派知識人は、日本人が押しつけた「内鮮一体論」を独自に「読みかえ」たというが、その点をもう少し説明して欲しい。

○米谷氏の回答

「内鮮一体論」は日本側の意図からすれば、朝鮮の民族性を否定しようとするものである。たしかに朝鮮側には、日本人にまったく同一化することによって差別を免れようとした人たちもいた。それに対して転向左派知識人は、朝鮮人としての独立性を保持しながら日本と一体になろうとしたのであり、「内鮮一体論」を朝鮮民族の自立性を高める方向で「読みかえ」ようとしたのである。

○趙寛子氏（中部大学）から米谷氏へ

京都学派の説く文化多元主義を朝鮮人が受容することが、どうして朝鮮人の主体性の形成になるのか。そうした考え方には強い違和感をおぼえる。

○米谷氏の回答

私は朝鮮人が主体性を強調したり、民族主義を主張したりすることを評価しようとしているのではない。そもそも京都学派の哲学そのものが、実体性を否定して関係性のなかで物事をとらえていこうとするものではないのか。したがってそれは、日本人の主体性や日本の帝国主義の実体化を否定するばかりでなく、朝鮮の主体性を実体化することも否定するものであるはずだ。

○菅原潤氏（佐賀大学）から米谷氏へ

今回の発表は、三木清と朝鮮知識人との関係が主であったが、そこに尾崎秀実を入れるとどうなるだろうか。

○米谷氏の回答

尾崎の場合は、中国の社会変革を認めながら、対話をしていこうとするものだ。その点では三木とは違う。

○菅原氏から中岡氏へ

『近代の超克』座談会では、まず西洋近代を定義しようとして失敗している。その要因を作ったのが下村ではなかったか。それは下村が、近代の出発点はルネッサン

スだとしながらも、その定義が非常に漠然としていたからだ。そうした点で下村の近代観とはどのようなものか。

○中岡氏の回答

下村は科学と技術とを区別せず、しかもそれを魔術と結びつけている。そしてその起源をルネッサンスにおいている。科学もルネッサンスもすべて魔術にしてしまったことに大きな問題があるように思う。

討論のまとめ

提題者が京都学派についてそれぞれ異なった視点から論じたので、京都学派の多様な側面を浮き彫りにすることができたように思われる。そのため討論も活発に行われた。

高坂氏の発表に関しては、論理的な観点からの評価なのか、社会的観点からの評価なのかという質問がなされたが、そうした質問が出るのも、京都学派そのものが多角的なアプローチを必要とする奥行きをもったものだからであろう。

米谷氏の発表は、「日本思想史」という学問の枠組みそのものを問う刺激的なものであったため、多くの質問が集中した。今後、京都学派のもつ意味を東アジアの思想史全体のなかで、どう位置づけていくかということが大きな課題として残されたといえよう。

中岡氏の発表は、下村という京都学派の臨界点ともいうべき位置にある思想家を取りあげたため、かえって京都学派全体がうまく逆照射できたように思われる。ただし、そうした下村が「主体性」をどう打ち立てるかという問題からみると、日本思想史における典型的な思想家でもあるということに平石氏の質問によって気づかされた。

従来京都学派については、宗教哲学的な立場から称揚されたり、戦争責任という面から一方的に断罪されたりしてきた。今回の発表と討論は、そうした固定観念を破るきっかけになるものとして大きな意義があったのではなかろうか。

（日本大学教授）